

【佳作】

再生

松浦 志穂（埼玉県 埼玉県立浦和第一女子高等学校 2年生）

男は身を起こした。下に布団の感触を感じる。そこは見知らぬ部屋だった。

「ちよろろー、おじちゃん起きたよ！」

四歳位の男の子がそばをにかけていき、一人の老人を連れてきた。

老人は布団の目の前までやってくると、ちよんと立て膝をついた。白いあごひげをはやしたその姿は、男に仙人を連想させた。

慌てて布団から出ようとするとするのを手でなだめられ、身分と年齢、履歴、体調などを尋ねられて初めて、男はスマホがなくなっていることに気づいた。慌てて財布を尻ポケットから抜くと、身分証の類もごとく抜き取られていた。

「ぼくのスマホと免許証つ、それにぼくは出勤途中だったはずです。あっ、そこで脇道に入ったとたんにつ」

落ち着きなさい、と老人に再びなだめられ、男はやっと口を閉じた。

免許証だけを手渡される。

ここは、と老人は言った。

「ここは、外界から隔離されているんだ。ここには一つの町がで

きているが、町からは出ることができないと思っしてほしい」「どういう……」

「別の言い方をしようか。いいかい、わたしたちは閉じ込められている。言葉通り、壁が存在するんだ。ここはきみがこれまでいた社会とは物理的につながっていないんだ」

男はぽかんとした。閉じ込められている、という言葉が一拍遅れて男の脳内にこだました。

理解が追い付かなかった。どういふことだ？閉じ込められている？どうして？だれに？

可笑しなことに、頭に最初に浮かんだのは「会社に連絡をしなくては」ということだった。

動揺を隠せない男に

「朝まで休みなさい」

と静かに老人は部屋を出て行った。

夜は停電のように突然訪れた。闇に沈んだ窓の外を眺める。不安よりも言葉にできない違和感が、男の胸をざわめかせていた。

翌朝、老人は男に案内役をつけてくれた。

町を案内してくれた女は、男の母親が生きていたら同じくらいの年齢だと思われた。

「これは公園。あそこは学校。あの辺は今つくり途中の家ね」

女はよくしゃべり、尋ねたことも尋ねていないことも丁寧に教えてくれた。

町はいつか映画で見た田舎の集落に似ていた。どの家も藁ぶき屋根で、地面がむき出しの道には大量の藁や二メートルはあろうかという木材が散乱していた。

家づくりはすべて手作業だった。男衆が空き地に木材を運んでいたり、穴を掘ったりしていた。

「トラックもコンクリートもないんですね」

「トラックもコンクリートでもないの」

ないのは車やコンクリートだけではなかった。

「電気も水道もないんですね」

「電気も水道もないの。でも水路はもうすぐできる予定よ」

指さした先を見ると、道の端に太い溝が掘ってあった。子どもが三人、笑い声を上げながら土手を駆けていった。

「なんだか昭和の農村みたいですね」と言うと、そうねと彼女はうふふと笑った。

町の果てまで来て、男はやっと「壁」の意味を理解した。男が今まで山だと思ってきたのは、ただの壁紙だった。手を触れると、ガラスのような素材に裏側から風景が貼られているのが分かった。

「大丈夫ですか？壁を目にすると、やっぱり取り乱す人が多いの  
で」

女が気遣わし気にこちらの様子をうかがっていた。

「はい。……実はぼくにはもう身寄りがありません。だから、ここから出られないのはなんとですか……いえ、ショックですけれど、思ったより現実を受け入れられたというか……。もちろん今までとは全然違うけど……」

ほっとしたような困った顔で女は笑った。

男がこの町に来てから一週間が経った。

男は拡張途中の町をあちこち手伝っていた。会社勤めでなままた体に肉體労働は応えたが、自らの手でつくった家や道具を喜んで使ってくれている人を見るのはなによりうれしかった。

一方、ここが元の世界といかに違うかというの目を追うにつれて浮き彫りになった。

まず、太陽が無い。これに気づいた時、男は愕然とした。天井とでも呼ぶべきところから、町全体に光が均等に降り注いでいるのだ。次に昼と夜の間がなく、ついでにいえばその時刻もばらばらだった。まだ午後四時なのに一瞬で真っ暗になった時には皆ひどく困った。

食べ物や木材、金属のかたまりなどが一夜にして町のあちこちに出現するのも異様だった。

またこの人は多くが元々独り身で、例外なく元の世界から来ていた。ここで生まれたのは子どもだけだった。

電気のない昔の時代に戻ったかのような暮らしに、男はだんだん馴染んでいった。

「おい、新しい住人だよ！誰か町を案内してくんな！」

ある日仕事仲間から声をかけられ、案内することになったのは年若い女だった。

「びっくりしただろう、いきなりこんな場所に来て。でもいいところだよ、ここは」

端まで歩いて、女は黙って町を見渡した。彼女は道中ずつと口を開かなかった。

返事がないのに何度目かのため息をついた時、彼女が口を開いた。

「いいところ？ここが」

ひやりとするような笑いだった。男は思わず後ずさった。侮蔑と嫌悪と諦念がない混ぜになった表情だった。

「どういふことだ」

「へえ、やっぱりあんた気づいていないのか。おめでたいことだな。——教えてやろうか？」

「……なにを」

「いいかい、あんたはここに閉じ込められている、それは嘘じゃないさ。だけどね、それはオブラートに包んだ言い方だ。正確に言うどね、たぶん、あんたらは飼われているんだ」

一瞬意味が分からなかった。カワレテイル？

嫌な汗がふきだした。

——本当に、本当に思い当たる節はなかったか。いつのまにか現れる食料、天井のある空、山の風景の壁紙。夜が来た時、まるでスイッチを切るようだと思いはしなかったか。

芯から震えが駆け登ってきた。

——長老は知っていたのか？町の人たちは？

長老と話さなければ。その思いに駆られ、男は長老の家の向かって身を翻した。

我知らず女と先を争うような形で男は長老の家に転がり込んだ。

「どっした？」

息を切らせた男に長老はかなり驚いたようだった。花を抱えた手伝いの少年が目を丸くして戸口に立ち尽くしていた。

「……逃げ出さない」と

口をついて出た。長老が目を見開いた。

「知っていたんですか？ぼくたちは飼われているってこと、知っていたんですか？」

息を切らせてまくし立てる男を見、真顔の女に視線を移して長老はふっと息を吐いた。

「気づいてしまったか」

女に向けて言った。

「ええ。元のところに帰る方法もあるんですよ？」

確信に満ちた口調だった。男は女の方を首がもげる勢いで振り

返った。

長老の視線が戸口で固まっている少年をかすめた。

「ここでは駄目だ。部屋を変えよう。すまないが花をもっと摘んでおくれ」

最後の一言は少年に向けてのものだった。少年が家を出たのを確認し、長老は後ろ手で重い扉を閉めた。

がこんと音がした。

さて、と長老は二人に向かい合った。

「帰りたいかね？帰りたいなら帰る方法を教えてあげよう」

女はまっすぐにうなずいた。

男はすぐにはうなずけなかった。

自分は、帰りたいのだろうか？

長老は男の迷いを見て取ったようだった。

「確認してもいいですか」

彼女の眼は射貫くような眼光を発していた。

「なんなりと」

「私たちはここになにかに連れて来られた。なにかはニンゲンより大きいかもしれない。私たちはベットです。夜の間は置いてあるのは餌だ。藁や金属は材料のつもり。与えておけば私たちは勝手に働いて町をつくる。太陽の代わりに電灯のような物が使われていて、それで昼と夜の境目はない。なぜなら電気は点けるか切るかだけだから。天井というのは、ここが巨大水槽のような物の中だから。きつと私たちは観察対象なんですよ。私たちからは見えないけれど、私たちはなにかに見られている。……違いますか？」

男は息を呑んで長老を見つめた。

ぱち、ぱちとしわがれた手をたたく音が部屋に響いた。

「見事だ。来たばかりでそこまで推測するとは」

「みんなは…町のみなは知っていますか？」

「知っている者も多い。子どもは知らないがね。秘密を守れる年齢になったら伝えることになっている。自分で道を決められるように」

「じゃあやっぱり出口があるんですね？」

男が口を挟んだ。

「……ここまで明かされたならもう隠すことはない。しかし約束して欲しい、もし外に出たら決してこの町の存在を話さない」と

女が唾然とした顔で長老を見た。

「なぜです。得体の知れないなかに監視されているんですよ。このことを話せば元の世界の人が助けに来てくれるかもしれないのに」

「分からないのか？……いや、きみには分からなくても無理はないかもしれない」

「なに？」

女は男を振り返った。

「きみはここに来てから一日と経っていない。ここは確かにおそろしい場所だ、得体の知れないなかに依存した日々を送っているのだから。」

けど、この生活は前とはずっと違うんだ。もう会社に勤める必要はない。会社は嫌いじゃなかったけど、ぼくは今の仕事の方にずっとやりがいを感じている。公園をつくる手伝いをして、その公園を子どもたちが喜んで使ってくれる。晩御飯には隣の奥さんがおかずを差し入れてくれることもある。楽な生活ではないよ。自分たちで何もかもやらなくてはいけない。いつこの生活が

破綻するかも分からないしね。でも、少なくともぼくは、前よりずっと充実した生活をしていると思う。朝起きて、ごはんを食べ、汗を流して、寝て……他のみなも、そういうことじゃないかな」

しばらく誰も口を開かなかった。

「それでも」

うつむいた彼女の前髪が目にかかった。

「私は帰ろうと思います。私も家族はないけれど、私のことを心配しているひとがきつといるから。……あなたたちは自分のことを待たせてくれている人が一人もいないとでも思っているのですか？」

「お嬢さんこそ」

長老が口を開いた。

「そんなのは幻想だとは思わないのかね？そう信じたいきみの自己満足ではないと言いつけるかね？」

「な……」

今度は女が絶句する番だった。

「所詮他人は他人だ。きみは命を懸けてまで友を助けようと思うか？現に誰一人来ないではないか。行方不明だと声を上げる者もない。この三年間、行方不明になっているとこの町の住民が外の世界で騒がれたことは一度もない。結局わしはこれだけ生きてきて、それっぽっちも人々の記憶に残りはしなかったのだ。きつと他の住民もそんな生き方だったのだろうよ」

「でも」

言いかけた声を男は遮った。

「だからこそだ。ぼくたちはこの町で一からやり直したい。ぼくがいなくなった時、せめて誰か一人でもぼくのことを覚えていて

ほしい。それがここに来てやっと分かったんだ」

「そう」

が**ん**ばってね。そう言い残し、女は長老について静かに部屋を出て行った。

これから女は元の世界へ帰るのだ。多分自分がもう戻ることのないあの世界へ。

「さようなら」

眩いた言葉は女に届くことはない。こんな世界だと知っていて、男はこの町でやり直すと決めたのだ。